

■■■ ユヤジュンジュン ■■■

2月15日から18日までの4日間、鹿児島県奄美群島のひとつ徳之島に神戸大学の岡田浩樹教授、KFCスタッフ呼徳力根(フフデルゲル)の3人で調査に行ってきました。

今回の調査は、神戸大学とKFCが今年度から進めている神戸に暮らすマイノリティの歴史や文化、移住経緯や生活実態研究の一環として、戦前から多くの移住者を神戸に送りだした徳之島との繋がり、琉球文化とヤマト文化の狭間として育んできた奄美(徳之島)固有の文化が生みだしてきた島と移住地で展開されるコミュニティ活動、移住地(神戸など)で発生するマジョリティ(多数者)との共生や軋轢といった事情を調べ、震災後によく取り上げられる「多文化共生」とは違う視点で神戸の「多民族」共生の源泉を探るという目的です。

徳之島には、行政区分として現在3つの町がありますが、実質調査日が2日間しかなかったことと事前に話を聞かせてもらった神戸在住者が徳之島の亀津地区出身ということもあって、亀津地区を所轄する徳之島町中心の調査としました。

そこで徳之島町役場に事前に調査の趣旨を説明し協力をお願いしていたところ、都会の自治体と違い調査初日から高岡町長から直接話を聞かせてもらった上に、企画課長と係長から徳之島町の概要説明と資料提供を受けたほか、郷土史研究家のHさんを紹介いただき調査に同行いただくなど徳之島町役場の全面協力から調査は始まりました。

いきなり驚かされたのは、町長が自分の配偶者は「フィリピン」出身であること、島でスナックに働いているホステスさんにはフィリピン人が多いことなどを何のてらいもなく話した上に、町スタッフが徳之島町の外国人登録者数データもすぐに準備してくれたことです。個人情報云々で難しい時代にオープンな人と街の片鱗を見たように思えます。

データによると2010年度統計で約1万2千人が暮らす徳之島町に外国人登録している人は54人、町長のいうとおり内36人がフィリピン人です。日本の離島にさえ、外国人の暮らしを確認して、すみずみまでグローバルに人が移動する時代になり、今やどんな「田舎」にも外国人が暮らす時代になっていることを感じました。

では外国人を受け入れている「日本」の地方の一つである徳之島ですが、この島は単純に「日本」という場所でもないようです。

高岡町長は、島で黒糖焼酎をつくる会社を経営していて、昔から関西に出荷する数が多い理由は何故かと思っていたそうです。その後、島の人たちが都会で(被差別者として)リンチにあたり(関東大震災時の朝鮮人虐殺時にもシマグチを話す奄美出身者が朝鮮人と間違われ、犠牲になったと言われています)、「琉球人・奄美人お断り」と住宅差別を受けたり、「三国人(戦後戦勝国でもなく敗戦国でもない植民地国出身者に使われた蔑称)扱い」を受けるなど様々な差別を受けながらも、移住地(特に阪神間)において表の世界でも裏の世界でも成功をおさめ島と繋がっていることを知り、これからの島の発展に活かしたいと考えています。

モデルとしては、華僑ネットワークのように島と移住地を同郷者が経済的、文化的に繋げることができないかを考えていました。具体的な取り組みとして、大阪市内に徳之島出身者を社員とする社団法人徳洲会を設立、島の加工品などの関西への流通に一役買ってもらおう予定です。

1926年生まれで小学校教師を定年退職した郷土研究家のHさんは、鹿児島県の教員に採用されていた期間、奄美大島に赴任したことはあるが、郷里である徳之島は嫌で希望しなかったそうです。島に劣等感を感じていたHさんは、その原因として学校で取り組まれた「標準語」運動(鹿児島からはば派遣されてきた教師による体罰や圧力をともなったシマグチの実質的な禁止)をあげています。

Hさんは、現在鹿児島県に暮らしていますが、「シマンシー」という言葉で、奄美出身者が差別されることや教員が奄美群島の島に派遣されると、「島流しされた」と揶揄することなど奄美の島々が一

段低く見られていることも語っています。

シマグチの禁止は、調査の世話をしてくれた1959年生まれのS係長も「シマグチを学校で話したらバケツを持って立たされた」と語っています。またS係長は、東京の大学在学中、「徳之島」という地名を意識的に使わなかったことも島に対する劣等感からだと言っています。

調査2日目には、実際に神戸に移住したことがあり、現在徳之島でパン屋を営んでいるTさんと母方のお婆さんが神戸に移住し本人は尼崎、宝塚で育った移住3世のMさんから話を聞きました。

S係長と同級生のTさんは、高校卒業後島で働いていましたが一度は都会で働きたいと思い、東京で一時働いていた同級生と22歳で上京、3年間働いた後、島に戻り沖縄糸満漁師の息子さんと徳之島に住んでいた方と結婚、板金工だった配偶者が夢であったパン屋の開業資金を作るため、1990年から地震まで兵庫区の御崎で暮らしていました。

神戸時代の思い出として、自転車でさまざまな豚肉を買いに長田のマルヨネ（徳之島出身者経営の肉屋）さんまで来たこと、東京にはなかったチャンポンメン（インスタント麺）があつて嬉しかったこと、借りた文化住宅の隣が徳之島出身者で仲良くなれたこと、保育所で出会ったお母さんが徳之島出身者でよく子どもを預かってくれたことなどを話していました。

また徳洲会（かつての亀津会）が主催する運動会に子連れで参加して楽しかったことや島出身者とわざとシマグチを使って、「私たちのことコリアン（言葉が通じない）だと思ってるんだろうね」とふざけたことなど、神戸においての徳之島出身者コミュニティや文化（言語）のエピソードも話してくれました。

Mさんは、集団就職で親戚が多く暮らす尼崎に来たお父さんと神戸で暮らしていたお母さんの長女として生まれたので徳之島には成人するまで2、3回しか行ったことがなかったそうです。

しかし、子ども時代、正月などには尼崎にある大きな中華料理店に何十人も親族や同郷者が集う環境で移住地でも島コミュニティがあったと言っています。またお父さんは、「なめられたらいけない。そのためにはシマグチのイントネーションを変えねばならない」と同郷の後輩に語っていたとのことでした。

言葉（シマグチ、イントネーション）の問題は島でも移住地でも島出身者にとって大きな壁だったようです。

現在、「なぜか落ち着く」島で暮らすMさんは、地元の民謡教室に通い三線も習っていて、夜に徳之島の人たちが開いてくれた歓迎会で聞かせてくれました。

Tさんは、話の最後のほうで島は収入が少なくても野菜や芋などもらえるものが多くお金がないと何も買えない都会と違って暮らしやすい。また今、娘さんが東京の専門学校を出て暮らしているが、自分が東京にいた時、面倒を見た人が娘の面倒を見てくれている。

「ユヤジュンジュン（世の中は順番）さ」と気負いなく話されました

この言葉を聞いた時、いろんな「マイノリティ」の人を地域が受け入れることは、その後続く「マイノリティ」も受け入れる力を地域が持つことなんだと理解しました。神戸の「国際性」は、街並みや、言語という方ばかりではなく、「ユヤジュンジュン」のスピリットであってほしいと思います。最後に厳しい現実として奄美群島の子どもの成績は、鹿児島県で最も低いこと、高齢者の単身世帯ばかりになっていることなどを地元の学校や役場で聞きました。

島に若者が就く仕事がない事情から、徳之島の子どもは高校を出ると90%以上の確立で島を去ります。その為5万人以上いた人口は年々減り今は島全体で2万5千人になっています。

外に出なければならぬ土地は、昔から日本にあり、文化や言葉の違いから移住地で蔑まれたり、排除されてきました。現在はその規模がグローバルになり国境を越えての移動が激しくなっています。戦後、軍政におかれた奄美や沖縄は一時期、外国になりました。その歴史をもう一度検証することは、わかりやすい文化の並列から語られる「共生」とは違う視点を持つ上で大切です。

今回は調査する時間がありませんでした。出会った奄美の人たちが皆なぜ一文字姓からヤマトの標

準的な二文字姓に変わったのかという要因など機会があれば調べたいと思っています。

徳之島には問題もたくさんあるようですが、今でも女性の出生率は、徳之島にある3町が全国の1～3位を独占しているそうです。私たちのためにわざわざ公民館に集まりシマ唄を聞かせてくれる温かさは南の島だからだけではないようです。（金 宣 吉）

■■■KFC日本語プロジェクト■■■

◆新年会～歌あり、クイズあり

1月15日、私たち火曜日に勉強している支援者と学習者は勉強の後、一緒に食事をする集いを持ちました。昨年に続き2回目です。

参加者は伊藤さんとグループレッスンの学習者6人、枝木さんと藤井さん気賀とそれぞれの学習者3名と3歳になる娘さん、保育担当の塚本さん、スタッフ3名と理事長の18名でした。

同じ時間帯に同じ場所で勉強していますが、終わる時間に少しずつ差があることもあり言葉を交わすこともなく帰っていきます。

昨年は雛祭りの時期に開いたのですが、今年は正月の余韻の残る1月でしたので、支援者が手作りの料理を持ち寄りました。

重箱に詰めたかまぼこ、伊達巻、肉団子、色どりのよい野菜の煮物、赤飯、おにぎり、炊き込みご飯、それに鶏肉のから揚げなどでした。一方学習者の中でドーナツ、スナックのおかきを持ってきた人もありました。支援者の手によるチーズケーキもデザートとして登場、作り方も披露されました。

食後に三つのヒントを上げて、それに当たる場所や物の名をいうゲームをしました。例えば①電車が来ます②切符を買います③人がたくさんいます、ということから答えは「駅」です。三つのヒントを聞き終わらない前に答える人がいたり、いろいろな答えが出て盛り上がりました。

次に「しあわせなら手をたたこう」を合唱。そのあとフィリピン語、英語、中国語など自分の国の言葉で歌ってくれました。

最後に一人が即興的に「しあわせなら片付けよう♪しあわせなら片付けよう♪しあわせならみんなで片付けよう♪ほら、みんなで片付けよう♪」と替え歌を歌い出しました。タイムリーなことで、これを機に皆で一斉に片付け始め、1時前には閉会しました。

昨年は、集いを機にメールを交換するように親しくなった学習者もあったようですが、今年はどんな交流があったのでしょうか。

こんな会が淡々と流れる日常に学習のめりはりにでもなれば幸せです。

（ニュース係 気賀 倭文子）

◆日曜日日本語教室での取り組みについて

日曜日教室は日曜日にシューズプラザで行っている日本語教室です。現在は午前と午後、合わせて学習者9名、支援者7名でマンツーマンレッスンを行っています。今回はその午前のクラスで始めた新しい取り組みについて紹介させていただきます。

去年の10月以降、マンツーマンでレッスンの一部に、学習者みんなで学習するグループ学習を取り入れるようになったことです。グループ学習を取り入れることになった背景には、二つの理由があります。一つは、マンツーマンではなかなか話す力が身につけていないのではないかと支援者の意見があったことです。日曜日教室では長い学習者では3年以上、同じ支援者と学習しています。それ自体はとても素晴らしいことですが、緊張感がなくなっていることも事実です。二つめの理由は、せっかく同じ場所で学習しているのだから支援者同士、学習者同士、支援者と学習者の交流の機会をもてないか？ということでした。これまではなかなか一緒に学習している学習者、支援者としか話をする機会がなかったのですが、グループ学習を取り入れることによって様々な交流が生まれるのではないかと考えました。

昨年10月から支援者と何度もミーティングを重ね試行錯誤した結果、グループ学習は次のような形式になりました。毎月4週あるうち1～3週目は毎回15分程度、4週目は30分程度のグループ学習をします。1～3週目はアクティビティ、インタビューゲームやリスニングなどを行っています。ジャスチャーゲームやスリーヒントゲーム、それ以外にもあまりマンツーマンでは学習する機会のないリスニングをしたりします。4週目は毎月何かテーマを決め学習を行っています。これまで図書館をテーマに図書館の利用の仕方を学んだあと、実際に図書館へ行ってみるということを行いました。それ以外にも、12月には日本のお正月、1月にはベトナムのお正月についてみんなで話をしました。学習者の中にはあらかじめ文章や写真を用意したうえで、ベトナムのお正月の過ごし方について説明してくれる人もいました。

グループ学習をスタートしてから、学習者のいろいろな面を知ることができました。なかなかマンツーマンレッスンだけでは知ることができなかつた学習者の一面を知ることができ、そこにマンツーマンレッスンの支援のヒントがあったりもします。また支援者と学習者同士の交流も、以前に比べ増えたのではないかと感じます。日本語教室はもちろん日本語を学習する場ですが、それ以上に学習者や支援者にとっての楽しい場所であることを目標に、今後も支援者のみなさんと協力しながら教室づくりを行っていかねばと考えています。

(日曜日教室担当 矢根 寛子)

◆日本語プロジェクトを振り返って～101号記念

1997年3月17日、KFCニュース第1号が発行されてから13年、今回が101号になります。

初期の1ページの紙面から、今では10ページの充実した内容の出版物となり、KFCの事業の発展と共に進化してきました。

ここで、初代グループレッスンの先生をされていた高橋博子さんと共に、その頃の事を思い出し、記憶を頼りに振り返ってみようと思います。

私が参加した時は丁度グループレッスンが始まって半年の頃、1999年の秋でした。震災後、鷹取の避難所でベトナム人に日本語を教えたのがきっかけで、だんだん人数が増え、支援者が足りないということで初級者を纏めてクラスとして学習支援が始まったといえます。四月に開講して半年目、アシスタントをされていた学生さんが辞められて後任を探しておられる時でした。三ヶ月間の日本語教師養成講座を受けたばかりの、全然自信の無かった私でしたが「アシスタント」ということでお引き受けしました。不安を持ちながらの日本語支援ボランティアのスタートでした。新長田駅前のナンコウビル（倉庫のような狭い階段のある建物）の三階が教室でした。学習者は10名ぐらいだったでしょうか、ベトナム人が主で、フィリピン、インドネシア、中国、イラン等、いろんな国の若い人たちが、仕事の帰りに来る夜のクラスでした。週二回、7時～8時半まで「新日本語の基礎1」で勉強していました。仕事の都合で遅れてくる人、雨だとお休みする人、みんなそれぞれの事情がありましたが、和気藹々と、学習意欲いっぱいの元気なメンバーでした。

異なった国の人たちの共通語は日本語、片言のにほんごで会話しているのが新鮮でした。

新長田北側のシューズプラザの4階に教室を移して2000年4月から新しいクラスが始まり1年間勉強しました。一時は学習者が12、3人になり、これはアシスタントが必要だ！と感じたりしました。

この時アシスタントをしたのが私の日本語ボランティアの原点となっています。無理をしたわけでも、頑張ったわけでもなく、スタッフの方や、同志の方達に支えられて、出会いと別れを繰り返しながらも、楽しかったから、やりがいがあったから、そして必要としてくれる人がいたから続けて来られたのだと思います。今では自分の生活の一部になりました。皆さんに感謝です。

教室はその後、PIAZZAビル、そして現在のアスタクエスタ北棟と移転し、教材も増えてボランティア団体とは思えないような良い環境になりました。KFCを運営されているスタッフの方たちの熱意と努力のお陰です。

グループレッスンも保育付きクラスができて、現在5グループになっています。

多くの若い支援者がここを実習の場にして巣立って行きました。今は少し高齢化しているよう(?)ですので、若い支援者が増えてほしいと願っています。コーディネーターがいるので、日本語プロジェクトとして安定し充実してきたと思います。

初めの頃のあの学習者たちは今どうしているのでしょうか？ 今では日本語が自由に話せるようになり日本の社会の一員として活躍されているのでしょうか？願わくば同窓会などがあればいいのですが・・・

(ニュース係 谷先 晴代)

■■■KFC外国にルーツを持つ子どもの学習支援■■■

◆ブラジルに帰国した子どもたちと教育問題

2月25日18時半から、moi(多文化子ども共育センター)で教育セミナーがありました。題目は「ブラジルに帰国した子どもたちと教育問題」です。講演してくださったのは大阪大学大学院人間科学研究科博士課程の山本晃輔さんです。山本さんは、ブラジルへの移民百年誌の発刊を機に日系ブラジル人子弟の教育問題に入られ、1年間のブラジル滞在経験もあります。

パワーポイントを使って、ブラジルの紹介から話は始まります。大都会と見はるかす農地、対照的なその二つがブラジルにはあります。日本に出稼ぎに来ていた日系ブラジル人がブラジルに帰るとき、その帰り先はほとんどの場合農地です。

1908年に始まった日本からのブラジル移民政策。第二次世界大戦を機に出稼ぎの考え方からブラジルへの定住化が進みました。戦後も続いた移民政策をへて、ブラジルの経済不況で行き場を失った日系人。その一方で労働力不足に悩む日本政府は、日系人の日本への入国と日本での就労を事実上認めました。しかし2008年末サブプライムショックによる経済不況と派遣切りで働き口が大幅減少。この影響で日系人がブラジルと日本を大量に往還する現象が現れました。

第1のケース・・・セルージュオは、7歳の時日本に出稼ぎ中の両親のもとへ渡った。両親の仲が悪く結局離婚。ブラジルに居る祖父母のところへ帰ったが、大学入試に失敗。今は日本で暮らしている。日本で外国人だった彼は、ブラジルでも外国人だった。家族にも社会にも居場所がないと感じている。第2のケース・・・ユカは小2まで日本の学校、小3から小5まで日本のブラジル人学校に通った。その後、父と一緒にブラジルに帰ったユカは、帰り先の小さな町で現地ブラジル人の友達と自分の趣味の違いや言葉の違いに気づき、自分は日本的な部分のほうが強いと感じていた。ユカは今は日本で暮らしている。

第3のケース・・・レアンドルは小3まで日本の学校、小4から中1まで日本のブラジル人学校に通い、その後ブラジルに帰り、現在15歳。3年前から本格的な太鼓を練習し始め、今では地元の太鼓グループのリーダーを務めている。将来は医者か薬剤師になろうと考えている。

第4のケース・・・ミナミは12歳から15歳まで日本で暮らし、日本のブラジル人学校に通った。両親が離婚し、今は母と祖父とともにブラジルで暮らしている。将来は大学で言葉の勉強か、体育の教師になりたいと考えている。住む場所は、日本のほうが良い点が多いと思っている。母親が今年度中に日本へ再度の出稼ぎに戻るようなので一緒に行きたい。日本の友人とはインターネットを通じて連絡を取り合っている。

ブラジル滞在中にブラジルの教育担当部局にも聞き取りをしたが、日系人子弟の教育問題はほかの優先課題より低く扱われている部局が多い。日本の日系人受け入れの初期段階と酷似している。

子どもたちと社会をつなぐ結節点は、学校にある。しかし、その学校は往還する日系人子弟の教育問題に取り組み始めたばかりである。

今回取り上げた問題に関係する家族だけのものとせず、社会がそれに向き合うことが必要ではないか、との山本さんの声が印象に残った講演でした。

(ニュース係 操田 誠)

◆年末お楽しみ会

2010年も残りわずかとなった12月28日（火）に、「年末お楽しみ会」を開催しました。今回は、小・中学生と「定住外国人子ども奨学金」の奨学生である高校生のお兄さん、お姉さんとの交流を図り、一緒にお楽しみ会に参加してもらいました。

まず始めに小・中学生の勉強を奨学生に見てもらいました。奨学生たちは、最初は子どもたちに勉強を教えることに慣れていないようで、とまどっている様子でしたが、すぐに慣れ楽しそうに勉強を教えてくださいました。小・中学生たちも、はじめて教えてもらうお姉さん・お兄さん先生がほとんどで緊張している様子が伺えました。しかし、すぐにどの机からも笑い声が聞こえてきて、賑やかな学習の時間となりました。やはり子どもにとって年が近いお兄さん・お姉さんに教えてもらうのは嬉しいようです。

次に、チーム対抗戦でゲームを行いました。チームは小・中学生と奨学生で編成されており、奨学生たちがチームを引っ張ってってくれました。司会はサンタさんの衣装を身にまとった奨学生が務めてくれ、サンタさんの登場にみな大喜びでした。サンタさんによる司会がとても上手で、ゲームは白熱したものへとなくなっていました。

最後にみんなでパフェとホットケーキを作りました。パフェはみんなが好きな具材で作れるように、ヨーグルトや果物、シリアルにアイス、クッキーなどを用意しました。みんな楽しそうに作っており、それぞれで美味しそうなパフェが出来上がっていました。ホットケーキもあまり子どもたちは作ったことがないようで興味津々で焼き上がるのを眺めていました。なかには奨学生と一緒にホットケーキ作りを手伝ってくれる子どももたくさんいました。生地をホットプレートに流し入れたり、裏返したりするのが楽しかったようで、「僕も」「私も」と代わる代わるやっていました。作るのも食べるのも楽しかったお菓子タイムはみんなご満悦の様子でした。とても楽しいお楽しみ会となりました。

奨学生たちとは年に何回かしか会わないのですが、会うたびに大人へと成長していく彼らを見ると非常に嬉しくなります。特に今回はのお兄さん・お姉さん役として参加してくれ、普段は見られないような一面も垣間見ることが出来ました。面倒見がよく、盛り上げ上手な彼らはすぐに小・中学生から慕われていました。

小・中学生は、いつもは大学生以上の方に勉強を教えてもらうので、高校生と接する機会はほとんどありません。奨学生と出会ったことで、自分はどんな高校生へと成長していきたいのか奨学生をモデルに想像出来るようになってくれたら嬉しいです。

これからも定期的に小・中学生と奨学生の子どものための交流の場を設け、一緒に楽しい時を共有出来るようにしていきたいと思います。
(青戸 彩)

◆書初め&かるた大会

年末年始の厳しい寒さがまだ残る1月5日。KFCでは、書き初め大会を行いました。KFCに学習に来ている子どもたちの多くが、冬休みの宿題に書き初めが出されているようで、今回の書き初め大会は、宿題を一つ終わらせる良い機会になったようです。

書き初めを始める前には「習字、苦手やあ〜」などと言っていた子どもたちも、実際に書き始めてみると、普段あまり使わない筆で字を書くことを楽しんでいる様子。「『る』の字が難しいい〜」「あ〜これアカンわ」「下が書けんようになってたあ〜」など、ときどき愚痴も言いながら、自分の納得できる字が書けるまで、一生懸命に筆で字を書く子どもたちの姿がとても印象的でした。

書き初めの後には、みんなでお餅とホットケーキを焼いて食べました。お餅は“きなこ”で食べる子がほとんどだろうと、私は勝手に予想していましたが、予想に反して、“砂糖醤油”でお餅を食べる子がほとんどでした。お餅やホットケーキ焼く時には、子どもたちが積極的にお手伝いをしてくれ、大変助かりました。

最後には、みんなでカルタ大会をしました。取ったカルタの枚数を競い合う子どもたちの姿は、なんとも正月らしい光景でした。

今回の書き初め大会では、日ごろ学習支援でお世話になっている支援者の方々に、ご協力を賜りました。年始の御多用中にもかかわらず、ご協力を賜り、誠にありがとうございました。（赤嶺 佑一）

◆就学前の子どものプレスクール

1月29日（土）からの毎週土曜日、全8回の予定でKFCプレスクールが始まりました！来年度（今年の4月）に小学校へ入学する子どもが対象です。毎回、10時45分から11時25分までの40分間、机に座って色々な学習をしたり、先生の指示をすばやく聞いたりする練習をしています。実際に小学校1年生の教科書を使ってのひらがなの勉強や、数の勉強も予定しています。ことばカードや絵本など、KFCの豊富な教材のなかから楽しい学習活動ができるように工夫しています。毎回行っている、パズルや間違い探しの「あたまのたいそう」プリントは、大好評です！

今は4月に入学をひかえた3人のお友だちが、プレスクールで学んでいます。3人とも別々の幼稚園や保育園に通っているので、このKFCプレスクールで初めて出会いました。回を重ねるごとに、だんだんと緊張もとけてきて、今ではとても仲良しになりました。

指導者の方も、初めての経験で、手探りの状態ではありますが、KFCスタッフとも授業前打ち合わせ、事後ミーティングを重ねながら、たくさんの人の力を借りて授業をつくりあげているところです。では、ある日のプレスクールの授業風景をご紹介します。

「おはようございます！」

元気のいいあいさつからプレスクールのお勉強が始まります。

習ったばかりの「正しい姿勢」で、みんなそれぞれの席に着きます。

いつものように、ひらがなの表を見ながら、大きな声で発音をした後は、ひらがなの書き取りです。「鉛筆を出してください。」という指示に、さっと机の中から筆記用具を取り出します。静かで集中した時が流れます。黙々とひらがな練習する真剣な表情は、もう立派な1年生のようです。丁寧に書いたひらがなプリントに「花丸」をもらったり、もう少しのところは、やり直したりします。

今日の絵本は、『とりかえっこ』というお話。ひよこが色々な動物に出会いながら、鳴き声をとりかえてもらうという、お話です。ひよこの鳴き声がどんどんかわっていく場面に、みんな大笑い。

お楽しみのパズルのプリントをして、帰る用意をします。

盛りだくさんの40分間が終わります。

「さようなら。」元気にみんなが帰っていきます。

次回は学校で使うことばを勉強したり、ハサミの正しい使い方も勉強したりします。最終回には、少し豪華なプレスクールの修了式をする計画を立てています！土曜日の午前中のKFCには、小学1年生のタマゴたちが一生懸命勉強する声が響いていますよ。（薮田 直子）

■■■ ハナの会 ■■■

◆新年の行事ヨロガジ（いろいろ）

新年の恒例で長田神社に初詣に出かけました。（1月4日、5日）オモ二達の体調や事情によって何人がスタッフがデイに残り、二日間で13人のオモ二と、スタッフ6名が送迎車2台で行って来ました。参道をゆっくり歩く方、車椅子で移動される方と境内に到着。まずはお賽銭を入れて手を合わせ、スタッフは今年もオモ二達がハナの会で楽しく過ごせるようにと祈りました。オモ二達はそれぞれ、何

をお祈りされたのでしょうか？

これも毎年恒例の書き初めをしました。年々参加される方は減って来ましたが、何人かのオモ二達が筆を持ち、墨を使って書き初めに挑戦していました。

1月11日に、ハナの会の6回目のお誕生日を迎えました。昨年6月から土曜日の開設となったことで新年会ができなくなったので、この週の昼食の時間は新年会を兼ねてのおいの会となりました。韓国語の『祝』の文字を入れた特注の丸い韓国餅を前に、理事長の乾杯のあいさつで楽しい昼食の時間となりました。

レクレーションで、福笑いを楽しみました。『氷川きよし』の写真を使い、バラバラになった眉、目、鼻、口を、タオルで目隠ししたオモ二達が悪戦苦闘。出来上がった顔は？それなりに男前にできたような・・・（ハナの会 スタッフ一同）

■■■ 今後の予定 ■■■

■研修会

5月14日（土） 13:30～15:00

「生活者のための日本語教育とは」

酒井 滋子（HIA日本語教育指導員）

■みんなで花見をしましょう

4月10日（日） 12:30～14:30 於 妙法寺川公園

■ハナの会・先生への感謝の日

5月15日（日） 於 デイサービスセンターハナの会

■KFC中国残留邦人帰国者等の交流会

4月12日、26日（火） 13:30～15:30 於 KFC管理道場スペース
（神戸市長田区腕塚町6-1-16）